海蝶ノヘイ 8

『目に見えないもの』最前線に立つ部隊

吉川英梨

今回も、2019年３月６日の横浜海上防災基地での展示訓練について書こうと思います。今回は、機動防除隊の登場です。

ガスが充満した機関室内において、ガスの漏洩元を突き止めてバルブを閉めてくる、という訓練が行われます。

ただ、見物人が多数集まるこの模擬船室で実際にガスと模したものを充満させるのは無理があります。がらんどうの空間の中央に、水蒸気のようなモヤモヤとしたものが出ている機械がぽつんとあるのみ。やがて、黄色の防護服に身を包んだ２人の隊員が、ガス検知器をかざしながらゆっくりと模擬船室に入ってきました。

ガスの充満先を突き止めるべく、慎重に、一歩一歩時間をかけて、模擬船室を回っています。

シーンと静まり返った模擬船室内に響くのは、防護服が擦れる独特の音。素材が似ているのか、ブルーシートを畳んでいるときの音とよく似ています。この音が増幅して聞こえるほど、場は静寂に包まれています。それがまたなんとも不気味に感じるのです。

これまでＡ水槽で波と水飛沫をリアルに感じ、Ｂ模擬船室で10㍍の高さからの降下を見て、気分が高揚していた直後です。

地味な訓練。

しかし、じわじわと迫るものがある。

実はこういった場面、小説の描写には非常に向いているんです。

映像では、音と画面で迫力をダイレクトに伝えられるのですが、唯一、伝えられないのが『におい』。

模擬船室でガスの漏洩元を突き止める機動防除隊の訓練

どういうにおいがするのか、登場人物がしかめっ面をするか、セリフに起こして説明させるしかありませんが、目と耳に入ってくる情報ほどのリアルさがないので、かえって伝わりにくいのです。

それが、小説では「地の文で緻密に描写できる」という利点があります。海上保安庁の話を小説にするなら、機動防除隊を全面に出した方がよかったのかも！　と今更ながら気がつきました。

でも大丈夫、来年の夏には『海蝶Ⅱ』を執筆予定です。なにもネタを考えていませんでしたが、いま、機動防除隊を出そうかな。

今回の訓練で想定されたガスにしろ、今年世界中をロックダウンさせたウイルスにしろ、『目に見えないもの』の脅威は、もしかしたら荒れ狂う波や高いところから降下することよりも人の恐怖心をあおるものなのかもしれません。３.11のころはみな、目に見えない放射能の恐怖に大騒ぎになりました。

機動防除隊は、海面流出した油の回収など、活躍は多岐に渡ると思いますが、この『目に見えないもの』の最前線に立つ部隊に、今後、注目していきたいと思います！　　（つづく）

ガス漏洩から流出油まで　機動防除隊に注目